Oxford U. P.、大きいものでは、Glare (ed.), *Oxford Latin Dictionary*, Oxford U. P.

文法書・辞書は、同じ本の最新版を手に入れるのが原則です。ここでは特に紹介しませんでしたが、関連のウェブ・サイトを利用するのもよいでしょう。

（荻原 理）

古典チベット語

1 古典チベット語はインド仏教研究の重要な道具
2 日本語に近い文の構造
3 サンスクリット語の知識と辞書の活用

1 古典チベット語はインド仏教研究の重要な道具

チベットの場合、“光”は南から射し込んできたようです。7世紀前半頃に当時インドで用いられていた文字をもとにしてチベット文字が作り出され、8世紀にはそれを用いた翻訳作業により仏教の経典・論典が組織的に伝えられて、今日に続く仏教王国チベットの土台が形作られました。更に9世紀初期には、サンスクリット語からチベット語へ訳す際に使う用語が統一され、その成果はSanskrit-Tibetan Dictionary 第一号ともいうべき一巻の書物に纏められて今に伝わっています。

仏教はインドで一旦滅んでしまいましたので、サンスクリット語で著された多くの仏典はその原本を失うこととなりました。そこで、中国で訳された「漢訳経典」（いわゆる“お経”）と並び、チベット語に訳された仏教聖典群、「チベット大蔵経」は、インド仏教研究でも欠くことの出来ない資料となっています。現代会話で用いられる口語チベット語とは多くの異なった言い回しを含む古典チベット語で綴られたチベット仏教文化の精華は、二百年近く前からインド仏教研究者の注目を集めてきました。今日インド仏教を専攻する講座の多くで古典チベット語が開講されているのも、このような事情に因るのです。

2 日本語に近い文の構造

チベット語を学び始めて先ず迎える関門が正書法の習得でしょう。先にも述べたように文字自体はインドのものから工夫されていて、30個のアルファベットの組み合わせでサンスクリット語やヨーロッパ諸語と同じく左から右へと横書きされますが、一音節単位を基本とする単語が一文字で表記されることは少なく、アルファベットやそれから作られた略字記号が複雑に組み合わされている場合もしばしばです。これと現代ラサ方言に基づく発音との対応を覚えるのには、少し時間がかかるかも知れません。毎日取り組むことが重要です。

しかし私たちに親しみやすい面もあるので、安心して下さい。動詞・助動詞・形容詞（総じて用言と言えるでしょう）が文末に置かれる点、助詞や接続詞に対応する「助辞」を名詞・動詞に付けて様々なニュアンスを表現する点では日本語によく似ていると言えます。「と」とそっくりな機能を有する daṅ を学んだ時に、また kyi の意味が「の」とよく対応することに気付いたならば、不思議な感動を覚えることでしょう。助辞同士を組み合わせた熟語のような語句も多数あり、いずれもチベット文の正確な理解に欠かせない要素です。

3 サンスクリット語の知識と辞書の活用

この助辞は、英語の“he / his / him”を“彼は／彼の／彼を”と訳すときの助詞と同じく、サンスクリット語を翻訳する際に、そこで出て来る名詞・形容詞の格変化を表現する手段としても活躍します。しかし場合によっては、チベット語の助辞が本来持っている意味どおりに理解するよりも、サンスクリット語の原語を想定してそちらの意味を考慮した訳語を当てた方が適切な場合があります。またサンスクリット語の接頭辞も訳語が固定化されており、同じく原語に還元して考えた方が意味を取り易くなります。サンスクリット語の知識を利用することで、チベット語理解の幅もぐっと広がります。

語学の習得に辞書の利用は欠かせません。優れた蔵和辞典はまだ刊行されていませんので Tibetan-English Dictionary を用いることになるのですが、以前より定評のある① H.A.Jäschke によるもの、② S.C.Das によるものがお勧めです。①は本格的チベット語辞書の先駆けであり、チベット人自身の書いた資料を読む際に必要となる口語的、俗語的表現にも注意を向けてある名著ですが、②はその成果を取り込みながらも更に増補されていて、熟語・連語の類を

明示してある点、チベット語に対応するサンスクリット語の提示が詳細である点で一層便利です。

（桜井 宗信）

サンスクリット語

1 インド・ヨーロッパ語族
2 「サンスクリット」と「古インドアーリヤ語」
3 「文法」と辞書
4 サンスクリット文献学

「サンスクリット」はインドの古典語で、正確には「古インドアーリヤ語」とよびます。もともとB.C.1500年頃からインダス上流域に入った「アーリヤ」を自称する人々の言語で、イランの諸語とは姉妹関係にあります。さらにギリシャ語、ラテン語をはじめヨーロッパの諸語や、ヒッタイト語などと共通起源に遡り、「印欧語族」と総称されます。18世紀の「サンスクリットの発見」以来、サンスクリット研究はインド研究に止まらず、印欧語比較言語学に始まる言語学、比較神話学、宗教学など、人文学諸分野の形成に重要な役割を果たしました。

紀元前４世紀頃、文法学者パーニニが現れ、「最も完璧な構造主義文法」と評される精緻さで語形と意味の派生法を記述しました。これに範をとるのが「古典サンスクリット」で、より古い段階を「ヴェーダ語」、マハーバーラタやラーマーヤナに見られる通俗形を「叙事詩サンスクリット」とよびます。アショーカ王碑文（B.C.３C.）、ジャイナ教典などには中期インドアーリヤ語が見られ、南伝仏教聖典もその一つ「パーリ語」で伝えられています。仏教諸部派の文献や大乗仏典の言語にも中期インドアーリヤ語の要素が見出されます。最終的にはヒンディー語をはじめとする現代インドアーリヤ諸語へと連なります。「サンスクリット入門」はこれら一連の言語への入口です。

サンスクリットは表現すべき内容を語形で処理する性格が強く、そのため、名詞変化は単両複の３数、男性・中性・女性の３性、主格、目的格、所有格など８格の三次元の組み合わせからなり、動詞には現在、完了など３語幹、能動・中受動の２態、直説法・願望法など複数の法があり、過去形が３つあるなど複雑です。その上、単語の切れ目を一つながりの発音形で記録するため、辞書の